



幕末・明治期の日本で活躍したフランス人 (3) (ポール・ブリュナー)

神戸大学 経済経営研究所
教授 青山 利勝

フランス中部の地方都市リヨンといえば19世紀に絹織物産業で栄えた「絹の街」として有名である。それまで手織り生産であった絹織物を、ジャカード織機の発明によって機械化による大量生産を行うようになったことが、リヨンの経済繁栄の原動力となった。ジャカード織機の発明者のマリー・ジョセフ・ジャカードはリヨン生まれの機械技術者である。彼の肖像画は現在でもリヨン市庁舎2階に飾られている。こうした背景もあって幕末にリヨンと横浜との間で絹貿易が活発に行われるようになっていく。

その契機となったのが1855年にスペインで発生した蚕の病気である。この病気は幾つかの害虫により複合的に同時発生したため、手の施しようがなく瞬く間にヨーロッパ全土に広がった。19世紀半ばのフランスの養蚕業と絹織物は世界一と評価され、ナポレオン3世治下の第2帝政期における最大の輸出品であった。特に繊細な織りのリボンが婦人服のフリルに使われてリヨンの特産品となっていた。リヨン南部でも養蚕業は盛んに行われていたが、絹織物産業の急速な発展によって原料となる生糸を輸入するようになっていく。こうした中でヨーロッパ全土に広がった蚕の病気は、リヨンの絹織物産業に大打撃を与えることになった。リヨン市内のクロワ・ルッスの丘陵には絹織物産業に従事する職工たちが多く居住していたが、失業者が増大し人々の不満が高まっていた。リヨン商業会議所はこうした事態を打開するため、生糸と病気に強い蚕を喫緊に見つける必要性に迫られていた。

事態打開の鍵は偶然にも日本にあった。当時、横浜に居住していたフランス商人から日本の蚕が病気に強いことや日本で上質の生糸が作られているとの情報もたらされたのである。1860年頃には生糸と蚕の卵を買い付ける仲買人が、リヨンからやってきて横浜の外国人居留区に住み着くようになっていた。それ以前の1858年に日本はアメリカ(7月)、オランダ(8月)、ロシア(8月)、イギリス(8月)、フランス(10月)と次々と修好通商条約を締結し、外国に門戸を開放していた。このため、外国商人が貿易を行いやすい環境が整いつつあった。これに、ヨーロッパの絹織物産業の原料不足が拍車をかけたのである。多くの外国商人が横浜に殺到し、生糸と蚕の卵の買い付けを行うようになった。こうして日本国内で需要と供給にひどいアンバランスが生じるようになってしまった。もともと江戸時代の養蚕業は質の高い生糸を家内生産していたため、その生産量は限定されたものであった。しかし、質の高い生糸の買い付け競争が激化したため、生糸価格は高騰し、粗悪品が大量に市場に出回るようになり、次第に外国での日本産生糸の評判が芳しくなくなっていた。

1867年に大政奉還が成り、翌68年に明治政府が設立されたが、相変わらず日本の生糸の評判は芳しくないままであった。日本で質の高い生糸を大量に生産できれば、欧米では高い需要があることから、高い値段で外国商人が買い付けることは明らかだった。このため明治政府は、政府直轄の事業として西洋式の製糸場の建設を決意する。こうして当時横浜にあったフランス貿易会社の生糸検査人であったポール・ブリュナーが工場建設と生糸生産のために明治政府の外国人顧問に就任することになるのである。

「赤煉瓦物語」（斎田朋雄著）によると伊藤博文や渋沢栄一がフランス人の役人（フランス公使館員）や商人に相談したところ、ブリュナーが推薦されたとしている。ブリュナーはリヨンから南へ車で約1時間余りのところにあるドローム県ブルク・ド・ペアーージュで生まれている。彼の父親がそこの市長をやっていたことはわかっている。しかし、彼の経歴や日本での勤務の後の足跡については不明な点が多い。当時のブルク・ド・ペアーージュは養蚕業が盛んで一帯は桑畑が広がっていたらしい。現在は葡萄畑が広がり、エルミターージュという銘柄のワインで有名な土地の一部となっている。しかし、横浜で生糸検査人であったことや彼の出生地がリヨンに近く絹織物産業の一画であったことを考えると、絹織物全般について高度の知識をもった技術者であったことが想像される。そして、彼の知識はリヨンの絹織物産業の中で習得され育まれたものと思われる。それは彼が明治政府に提出した製糸場建設の計画書からも明らかである。

こうして1870年6月からブリュナーと明治政府の役人は工場建設の適地を求めて関東全域を調査する。その結果、生糸の原料となる養蚕業が盛んであること、豊富な水があること、燃料となる石炭が近くで産出されることなどから群馬県富岡市に製糸場を建設することが決定される。1872年7月には日本で最初の西洋式の木骨赤煉瓦作りの富岡製糸場が完成した。富岡製糸場は明治政府直轄の官営工場で、日本が家内産業から近代産業へと発展していく礎となるものであった。

富岡製糸場は「女工哀史」でも有名であるが、そこで働く女工を指導したのがリヨン出身の技術者であったことは興味深い。リヨンの絹織物の伝統が富岡に根付いたのである。早くも1873年6月には富岡製糸場で生産された生糸が、ウィーンで開催された万国博覧会に出品され2等賞を獲得している。これによって富岡製糸場で生産された「富岡シルク」はヨーロッパで高い評価を受けることになった。

ポール・ブリュナーは多くの功績を残して、1876年2月に離日する。その後の彼の足跡は定かではないが、「富岡製糸場略年史」によると1882年に香港の米国系製糸会社へ就職、1906年富岡を再訪、翌年大日本製糸会より過去の功績によって表彰されている。

富岡製糸場は1893年に官営工場としての役目を終了し、三井家に払い下げられた。現在では民間企業に所有権は移っているものの、百数十年の時を経た富岡製糸場の構内敷地や建造物は富岡市の記念文化財として大切に保管されている。また、ブリュナーの家族が当時住んでいたブリュナー館も保存され、土地の人々に親しまれている。現在、富岡製糸場はユネスコの文化遺産登録を行うべく申請の準備が進められていると仄聞している。（了）